

下水道の維持管理無くして 国家の繁栄なし

グローバルウォータ・ジャパン 代表
吉村 和就



ローマ時代の水道橋は下水道の整備だった

昨年8月にスペインのサラゴサ・水の万博を見た帰りに、セゴビアの水道橋を視察した。ローマ帝国はなぜ、占領地の水道橋を整備したのか、その最初の目的は下水道にあった。

ローマ帝国の下水道の原型はBC600年頃「クロアカ・マキシマ」と呼ばれた大下水道溝であった、BC312年当時のローマ帝国の財務官アッピウスは「ローマ帝国の永続的な発展は道路整備と水インフラ整備である」と行政上の権限を持つ執政官を説き伏せた。なぜアッピウスは下水道の整備を急いだのか、その理由は市民の衛生状態の改善であった。

その当時、都市から排出された下水が谷に溜まり、そこから疫病やマラリア蚊が異常発生し、住民を襲い、ある日突然に都市が崩壊することが頻発していた。そこでアッピウスは、クロアカと呼ばれる下水道を徹底的に整備した。

汚水を完全に流し、疫病の発生（ペストや赤痢）を防ぐ、その為に豊富な水量が必要であり水道橋が整備された。もちろん水道水は公共水栓、公衆浴場、それに公衆水洗トイレに使用され、清廉な環境を保ちローマ市民の「安全・安心」を支えた。

水道橋から供給される豊富な水量は、良質な飲料水を供給すると共に下水管中に汚水や汚物を滞留させない流し出す役目であった。ローマ市内には公衆浴場と共に水洗トイレも普及した。ローマ人一人当たりの給水量は1000L・日であった。

ローマ水道は700年以上にわたり、水道長官の教えを受けた水道技術者集団により完璧に維

持管理がなされていた。この水インフラがローマ帝国の繁栄を支えた。しかしローマ帝国の末期には広がり過ぎた領土を保持するために持てる財力のほとんどが軍事に廻り、公共インフラ、特に下水道のメンテナンス費用が削減され、さらに人口減少と共に必要水量も減少した。その結果、優秀な技術者も去り、下水道が荒れ果てたまま放置され、相次ぐ内乱と蛮族の侵入でローマ帝国が滅亡した。

読者諸氏は今、日本の下水道は、「人口減少」、「水量の減少」そして「予算削減」、「優秀な技術者が去る」等が顕在化し、あの「ローマ帝国の滅亡」と同じ道を歩もうとしていることに気が付くであろう。

下水道は今まで国土交通省の予算で執行され、関係者の弛まぬ努力により全国下水道普及率72%を達成するに至った。しかし、平成9年に4兆8千億円あった下水道予算は、公共事業費の毎年3～5%削減により、平成20年には2兆円を切るにいたっている。しかも今後の日本は未曾有の経済恐慌を迎え、今後とも公共事業費の増額は期待出来ない状態である。しからば、どうすれば良いのか。国を守る為の大きな仕組みが必要である。ここで登場してきたのが、水の安全保障戦略機構構想である。

水の安全保障戦略機構…

下水道処理施設管理業協会は積極的な発言を

水の安全保障戦略機構は産官学、そして政界のメンバーで構成される任意の組織である。有識者からなる「全体会議」、そのメンバーが選任した「執行審議会」、さらに必要に応じ設置

される「専門委員会」の構成である。

機構の代表には首相経験者である森喜朗・日本水フォーラム会長が就任予定であり、当面の活動には政・産・学の各分野から推薦された10名程度の執行審議会メンバーが当たる。この中心になるのが「チーム水・日本」であり、国内外の水問題解決に向けた行動をしようとする組織・企業・人・グループの誰でも単独でも、複数のグループが連携してもチーム員になれる。さらに、いかなる水に関するテーマでも、どんな地域に対しても活動ができる仕組みである。

今までの下水道施設はプラントメーカー主導

で建設され、特に長期にわたる維持管理面から見た建設、またはりハビリがなされていなかった。つまり維持管理業の生の声が反映されてこなかった歴史がある。また自己主張する場がなかったのも維持管理業の弱みであった。今後は、このような「チーム水・日本」の舞台を最大限活用し、維持管理業の主張を最大限にすべきであろう。耐える時代は終わりを告げ、水インフラに最も重要な維持管理面をあらゆる関係者に啓蒙する時代が来ている。日本下水道処理施設管理業協会の今後の活躍を期待している。

